



ろこもこうさぎ

絢辻
透

「はあー…さすがに、ふらふらする、かも……………」

思わず帰りのエレベーターで独り言が出てしまった。会社の飲み会で思った以上に飲んでしまったようだ。

家で待つ彼氏、ユキくんの様子が心配だ。

ユキくんは私より二個下の大学生で、サークルで知り合った人だ。

背が高く怖がられやすいけど、本当はすごく寂しがりで、私がちよつとしないだけでものすごく心配する。少し遅く帰って来るとしよんぼりした犬みたいな顔をして、覆い被さるみたい抱き締めてくる。

それは嬉しいんだけど、申し訳ないし……………ていうか、今日は遅くなりすぎちゃったかも…。

十一時を回ったスマホをちらりと見て、ふらふらとした足つきのままマンションのドアを開けた。

「……………おかえり美羽、…何してたの？」

あれ？
思ったより怒ってるかも……………。

ユキくんの黒くて長い前髪から覗く目が据わっていて、お酒で真っ赤だったはずのほっぺたが青ざめていくのを感じる。
そんなに心配させちゃったかな…っというか。

「何って、えっと…飲み会行ってくるって連絡したと思うんだけど…」

「は？ 届いてないけど」

「え！？ うそ、…あ！ もしかして、地下だったから…？」

慌ててスマホを確認すると連絡に未送信マークがついていた。それと同じに、開いた途端に電波が通じたようで、ユキくんから帰りを心配する多数のメッセージを受信する。

「わ、ユキくん……き、気付かなくてごめん…！」

「……はあ…もう、マジで心配したんだけど。なんかあったかと思って警

察に連絡するところだった……」

「警察！？ ちょっと待って、私のこと子供だと思って、……あ、いや、ごめんなさい……」

思わずいつものような軽口が出るものの、咎めるようにじつとこつちを見つめられて口ごもる。

今回は完全に、私が悪いよね……。

「てか、連絡しなかったこともそうだけどさ」

「うん？」

「飲み会行つていいとか言つてないんだけど、俺」

「へ！？ ダメだった!？」

「……会社の飲み会、でしょ？ 他の男いるんじゃないの」

口を尖らせたユキくんが高い背を屈めて私に覆い被さってくる。うわ、今の私、お酒臭いかも……。

そう思いながらもぎゅっと抱き締め返すと、至近距離で見つめられて心

臓が跳ねる。付き合ってしばらく経つけど、顔が整いすぎてて見慣れないんだよね…。

「……やっぱいたんだ」

「えっ、あつ、いや…いたけど、喋ってないよ?!」

見惚れて沈黙していると、肯定と捉えられたみたいでより不機嫌そうな顔つきになる。慌てて首を振っても変わらさず、半ば無理やりお姫様抱っこされてしまった。

「ユキくん……?」

「……」

「……えっと、ごめん、気を付けるから……!」

「……美羽さあ、いつもそうだよな?他の男の前でそんな真つ赤でふらふらなとこ見せちゃったりするじゃん。全然自覚ないみたいだけど、…俺がどんだけ心配してるか、美羽のそんな可愛いとこ見せたくないか、全然わかってないよね?」

とす、とベッドに寝かされる。ユキくんは言いながら薄く笑っていて、あれ？ほんとにヤバイかも……。

怯えたように縮こまっていると、後ろから優しく抱き締められる。口調も仕草も全然優しいのに、確実に怒ってるのがわかる。

「だからー：今日はお仕置きね。もう二度と他の男の前で無防備なトコ、見せないように」
「ひゃ：っ!？」

仕専用のシャツの上からすり……♡ と、乳首を的確に撫でられる。お酒で力の入らない身体をいとも簡単に固定されて、首元に柔らかな唇を当てられる。く、くすぐつたい……!

「お仕置き……って、何するの……?」

「痛いことはしないけど、……もうやだっってくらい、いじめちゃうかもね」
「うう……っ」

怖いものの、自分が悪いという気持ちの方が勝って大した抵抗もできずにいると、ユキくんの手が胸からお腹を通り過ぎ、太腿まで下へと這わされる。そのままいとも簡単に仕事用のスカートの中に入り込み、パンツの上からクリトリスをカリ、と引っ搔いた。

「んあっ……♡」

「……ほら、こんなちよつと触っただけなのに、えっちな声」

「は……っん……♡　これは、ユキくんだからで……」

「ほんとに？」

疑い深げなユキくんに伝わるよう必死にこくこく頷く。そんな間もユキくんは指を止めてはくれない。

甘やかすようにすりすり♡と指の腹で撫でたかと思えばすぐにまた爪先で引っ搔かれる。

すりすり、カリカリ、カリカリ……♡

「あっ…♡ あっ、それ、だめえ…♡」

全然だめなんて思っていないような媚びた声が出る。ユキくんの長くて細い指が、次第に勃起しはじめたクリトリスの周りをくるくると行き来しはじめめる。

くるくる、すりすり…♡

「ダメじゃないでしょ？カリカリ大好きだもんね、美羽。ほら、パンツの上からでもわかるくらいおつきくなってきたよ」

「はあっ、あっ、あっ♡ 言わ、ないでえ…♡」

気が付けば閉じていたはずの足も開き始めてしまっていた。

クリトリスはもっともっ♡ とパンツにくっきりと形が残るくらい勃起しはじめているのに、まるでそれを褒めるように撫でられて、へこへこと腰が揺れる。

すりすり♡ カリカリカリカリ……♡

はっ、はっ、と犬のように息が短くなる♡

あっという間におまんこが濡れてきて、パンツを濡らしていく♡

「ひ、……んっ……♡ あっ、お……♡ ゆ、き……ゆきぐん……♡」
「……うん？」

くるくる♡ カリカリ♡

ユキくんの好みの薄いサテンの下着にじゅわりと愛液が広がって、綺麗な指を濡らしてしまう。

「ごめ……あっ♡ う、うう……♡ あの……っわ、私、おしおき……なのに……」

「……おしおきなの？」

「はあ、あっ♡ き、きもち、く、なっちやって……っ」

ただただ気持ち良いばかりの刺激が申し訳なくなって謝ると、一瞬手が

止まる。

やっぱり許して貰えないだろうかとわずかに涙ぐみながらユキくんのはうを見ると、興奮したように熱っぽく笑う顔が見えた。

「かわいい…、んーん、いいよ？ いっぱい気持ち良くなってるね、美羽」

「でも、おしおきって…ああっ♡ カリカリ、だめ、だめえっ♡」

「そう、お仕置きだから…：美羽」

かりかりかり♡

こすこすこす♡

かり…：っ♡

「イっちゃ、ダメだよ」

「え…：え、…：っ」

一際低く耳元で囁かれる言葉に喉がきゆうっ…：♡ と締まる。

「気持ち良くて、苦しくなっても……イっちゃだめ。お仕置きだから、ね？」
「あ……う、うづ……わ、わか、った……♡」

できるかなんてわからないけど、これは「お仕置き」だから。
がまんしなきゃ。

そう思えば思うほど裏腹に、もっともっと欲しがるように勃起するクリ
トリスと、ぬるぬると愛液を滲ませるおまんこ。

とうとうユキくんの指は溢れたそれですっかり濡れてしまった。
そんな指で、カリカリされたら……♡

「んあ、つあ、あ♡ ぐうっ♡ だめ、ユキくん、いつかい、止まってえ♡」
「なんで？ まだイきそうじゃないでしょ？」

かりかり♡ ぬりゆぬりゆ♡ さすさすさす……♡
濡れたパンツの上からクリトリスを撫であげられて、必死な声が止まら
なくなる。

いきそうとか、いきそうじゃないとか、そういう問題じゃない。痺れるような気持ち良さに身体の方が耐えられず、強すぎる刺激から逃げ出そうと力が入る。

「こーら、逃げない」

「うう…っ、ごめ…っお！♡ ああ♡ ギキくんっ、ちが、っあ♡ う♡
ちが、っ…♡ き、もち、よすぎて…♡」

「ん？ ああー、身体勝手に動いちやうんだ？ 可愛い、美羽…」

心底愛しげな口調で言われると自然と力が抜けてしまう。その隙を見計らうように更に抱き込まれ、身体を固定されてしまった。

「これじゃまだ動いちやうかなー…美羽、自分で足持ってて？」

「へっ…」

「膝裏んとこ、手で。自分で足開いて。できるでしょ？」

「へ、あつ、こ…こう…？」

自分から触ってください、って言ってるみたいなの、恥ずかしい体制にされて、顔が熱くなるのを感じる。

「上手」

ユキくんの優しい口調にほっとしたのも束の間、差し出したおまんこへの刺激が再開される♡

パンツなんて意味ないみたいになにに布越しにくちゅくちゅと割れ目を掻き回され、掬い取った愛液と共に屹立しきったクリトリスをきゅっ……！！♡とつままれる。

くりくり♡ぬちゅぬちゅ♡
かりかり♡……♡

「ひい、ん……っ♡ あ、ううっ、~~~~っく、うう……♡」

ユキくんの手が、もう濡れてぐしょぐしょにたるんだパンツを軽く引つ

張る。食い込んだパンツからは、ぴん♡ と勃起しているクリトリスが主張
していて、カッと顔が熱くなる。

「美羽のクリ、触って触ってっておねだりしてるみたい。えっちだね」
「ちがっ……♡ つあ、お♡ んう、うっ……♡」

カリカリカリ♡
すりすりすり♡

おねだりなんてつもりはないのに、触られると嬉しくて媚び媚びの声が
止まらなくなる。

もっとカリカリしてほしいけど、これ以上されたら……♡

「裏筋好きだよね、美羽」
「っひ!? ああ、だめっ、それッ♡ きもち、よすぎるっ、からあ!♡」

カリカリ♡ と裏筋を集中的に爪先でいじめられて身体が仰け反る。

「おあつ、あ、うあ♡ だめえ、つまむの、んあ♡ むりい……♡」

裏筋から先っぽまで愛でるみたいに爪先で撫でられる。

かと思えばそつとつままれて、遊ばれるみたいにくにくにゆくと皮ごと扱かれる。

次第に高まってくる絶頂感を堪えようと、抱えた足に力を込めると足先がぎゅっ♡ と丸まってしまつて、堪えてるのかイこうとしていいのかわからなくなる。

「こつちも触るから、頑張つてね、美羽」
「ひう……っ!?!♡」

無慈悲な声と共にもう一方の手が胸元へと忍び寄つて、腋の近くから擦るように這わされる。ブラジャーの肩紐をおろされたかと思えば、すぐにぶるん♡ と汗ばんだおっぱいと乳首が露出してしまった。

きゅ♡　くりくり、すりすり、すりすり……♡

「ひいん……っ♡　うう、いっしょ、に、するの、だめ……♡」

「……なに？　なにを一緒に？」

「うう……っかりかり、するの、」

「うん、どこを？」

「乳首と……くっ、……くり……♡」

すりすりすり♡

かりかり♡

乳首もクリトリスと同じようにコリコリに硬くなっちゃった。

恥ずかしさと快感でおかしくなりそうなのに、ユキくんは全然許してくれない。

「ちやんと行って？　どこのなにかダメか」

「あっ、んあ♡　ち、……ちくびと、っ♡　くり、と、りす……！　一緒に、

……っああ！♡　っかり、かりするの、だめええ……っ♡」

「こうするのがダメってこと？」

「あぐっ♡ んあっ♡ それ♡ それ、だめだってばあ♡」

かりかりかり♡

すりすりすり♡

乳首をいじめる手も、クリトリスをいじめる手もユキくんは全然やめてくれない♡

「自分で足開いて、どっちもピン♡ って勃たせてるのに、だめなの？」

「ひん……♡ だって、不っちゃやう、から……」

「我慢がんばるんでしょ？」

がんばって、って他人事みたいに言いながらクリトリスの裏筋を爪先で緩く弾いてくる。一生懸命快感を堪えようとするのに、へこ♡ へこ♡ と腰が揺れて、いく準備をしているのがわかる。

こんなの、無理だってば………！

「ううっ、あ、むりい…っ♡ も、いつちやいそ、だからあ…!!」

「ほーら、がんばって、美羽」

「ふうぐ…っ♡ あっ、あ!？♡ ゆび、なんで、ああ♡ 早くしないでえ…っ♡」

がんばって、つて言うのに指は早くなるばかりで、まるで絶頂を促すようにカリカリカリ…っ!♡と指を動かされる。乳首もクリも気持ち良くてつらい。嫌なのに、我慢してるのに…!!

「あ♡ あ♡ ああ♡ も、はなしてえ、いつちやう、ゆきく…っ、だめえ、も、♡」

「むり? もうがんばれない?」

「むり、むりい、あっ♡ おっ♡ ゆきく…!!♡」

聞きながらも指先は追い立てるようにくちゅくちゅ♡ と愛液を掬ってクリトリスに塗り付ける。

ぬりゅぬりゅ♡ すりすりすり♡

カリカリカリ……！♡

ぐーっと背中が仰け反って、足先がピンと伸びてしまう♡
だめ、もう、完璧に、イク準備できちゃった♡
イク♡ もうイっちゃう……♡♡

——と、ぴたりと、手が止まった。

「あ！？ ……つ~~~~、 ……ふあ……？」

「いきそうだったでしょ？」

突然全ての刺激が止んで、ユキくんの低い声だけに身体がビクつく。
急激な物足りなさを感じながらも素直にうなずくと、ちゅ、と耳元にキスをされて、緩やかに刺激が再開された。

「ふあ、 ……あ……♡ あ、 っありがと、 ユキくん、 んんっ♡」

「…どういたしまして？」

お仕置きなのにお礼言うの変だったかも……と思いつつ、少し笑いながら答えてくれるユキくんに安心する。

ただ身体は敏感なままで、さつきよりも優しい手付きですりすりされているはずなのにイきそうな感じが止まらない。

「うづつ、っあ、ああ♡　~~~~っく、うん……♡」

「どうしたの、美羽。痛い？」

「う、ううん……っ、きもち、よくつて、…っあ♡　あづっ……♡」

こりゆこりゆ♡　すりすり♡

かりかり♡……♡

先ほどの動きとは裏腹に、じれったいほど優しいはずなのに、一度いく準備をってしまった身体は言うことを聞かない。

小さな刺激を拾ってかくかくと腰揺らす私を見て、ユキくんがふつと

笑った。

「イきそうなの、止まんないんだ」

「つうう……、だつてえ……♡」

「ちゃんと我慢して？ ほら、おまんこきゅ〜つて締めるんだよ」

「ぐ、うん……♡ わか、つたあ、……んん……♡♡」

「いい子」

言われたとおりにきゅう♡と、おまんこに力を込めてみるものの、カリカリされるたびに気持ちよくて緩んでしまつて、ただおまんこをひくひくさせただけみたいになつてしまつてすごく恥ずかしい。

そうしているうちにまた、ユキくんの指が追い立てるように早くなつてきた。

くるくる♡ すりすり♡
かりかり♡

今度こそ止めてもらえず、びく、びく、と身体が震えて頭が真っ白になる。犬のようにはっはっと思をして体を落ち着けようとするのに、また叱るようにクリトリスをぴん！♡ と弾かれてしまった。

「~~~~っああ♡ まっ、まっでえ、ああ♡ やめてえ、ゆぎくん♡」

「……ダメって言ったでしょ？」

「だって、だっでえ♡ あ♡ カリカリ、むりだよお♡」

「がんばるって言うたのにねえ…美羽。じゃあ、ごめんなさいしよっか？」

「ふえ……?」

どうすればいいかわからなくて不安げにユキくんを見る。前髪の奥から細い切れ長の目がこちらをじっと見ている、いったばかりなのに背筋がぞくりと震えてしまった。

足を抱えたままだった手を外されて、ずっと後ろから抱きかかえられていたのに、それも開放される。

なんとなく心細くてシーツを握り締めていると、着たままだったびしよ

びしよのパンツも服も、ブラジャーすらも脱がされてしまった。

「あ、の、……ユキくん……?」

ユキくんは乱れたところもなく普段着のままなのに、自分だけが全裸でものすごく恥ずかしい。乳首はピンと勃ったままだし、おまんこはとろとろで今にも滴り落ちそうで。

ユキくんは私の正面に移動してベッドへ座ると、にこりと笑って言った。

「ちゃーんと、おまんこ広げてごめんなさいして? ダメって言われたのにカリカリされただけでイっちゃう雑魚クリでごめんなさいって」

「へ……、……っ!？」

「ほら、早く」

考える暇もなくトンと軽く押されてベッドに沈んでしまう。

耳元まで近付いたユキくんがもう一度、繰り返す。

「ほら、おまんこ広げて」

「ひゃっ……」

「あー…まだガン勃ちしてんね、美羽のエロクリ」

「や、だあ…♡ 言わないで…っ」

「期待しまくりで可愛いけど……、ほら早く、自分で広げて。ぐちよぐちよじゃん、ちやーんと抑えて？」

ユキくんの手に従されるまま、ぬるぬるのおまんこを自分の手で、触ってください♡ って言ってるみたいを広げる。

「うう…っ、おしおき、……して、ユキくん…♡」

「甘えてもだーめ。美羽。違うでしょ？」

叱るようにきゅ！♡ と、指先で挟んでクリトリスを扱かれる♡

「ひい……っ♡ だっ、……だめってえ、言われた、のに……♡」
「うん」

「か、かりかり、…ううっ、されただけで、いつちやっう……っ」

「……うん」

「ぎこくり、で、ご……っごめ……つなさい……♡ ユキ、くん……♡」

恥ずかしいことを言わされている状況にどんどん頭が働かなくなってしまう。

名前を呼ばれて不思議そうにこちらを見るユキくんに懇願するように腰をへこつかせて、必死に雌アピールをしよう。

「み……っみうの、えっちなごこくり……♡ もっと、おしおき、してください……♡」

ごくりと唾を飲み込んだ音が聞こえる。

恥ずかしさでばやける視界にイライラしたようなユキくんの顔が見えて、もっといじめてくれるかも……と、期待でぴく♡ とクリトリスがヒクついた。